慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	重要文化財に指定された塾所蔵の貴重書：『解剖存真図』
Sub Title	
Author	安田, 健次郎(Yasuda, Kenjiro)
Publisher	慶應医学会
Publication year	2005
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.82, No.3 (2005. 9) ,p.109- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	解説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20050900-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應医学・82(3)：109～118，2005

解　説

重要文化財に指定された塾所蔵の貴重書『解剖存真図』

慶應義塾大学名誉教授
安田健次郎（やすだ けんじろう）

Key Words：人体解剖図譜，江戸時代後期，医師自身解剖・描画

はじめに

平成15年4月に慶應義塾の所蔵する貴重書の中の『解剖存真図』が，文化庁から重要文化財の指定を受けた．人体解剖図の絵巻物であり指定の理由は『本書は実見の成果と蘭書からの知識に基づく総合的な解剖図集で，江戸時代の実証的解剖図の到達点を示す資料として，我が国医学史上大変意義が深い』である．1920年代に下谷の文行堂から購入した．義塾としては九番目，図書館所蔵の資料としては四番目の重要文化財指定である[1,2]．

本図は徳川幕府奥医師である桂川甫賢（桂川家第六代）が所蔵していたものである事が確認されている．そして収納箱の蓋裏書によると大正14年（1925）に慶應義塾の所蔵となっている．写本としては西尾市立図書館岩瀬文庫，東北大学狩野文庫，京都大学付属図書館，武田科学振興財団にその存在が知られている[3]．

著者および図の作製経過

この図譜は文政2年（1819）に淀藩（山城国，稲葉藩）の江戸勤め藩医である南小柿寧一（みながきやすかず，天明5年・1785～文政8年・1825）が描いたもので全83図が乾坤二本の巻き物になっている．南小柿寧一は南祐と称す．字は清人，号は西崖，通称は良祐．本図譜の附言の本人署名および師の桂川甫周（桂川家第四代）の記念灯籠に刻まれた門下生としての名は甫祐寧一である．36才の時この図譜を出版し41才でこの世を去った．江戸時代の解剖図譜としては内容が最も豊富で充実し色彩が実物に近いと評価されている[4-6]．南小柿は幕府の奥医師桂川甫周（第四代）について蘭方外科を学び，師の奨めによって腑分に参加し，この解剖図集を作製した．腑分観察の場所は関西の刑場の可能性もあるが，本人は幼少の頃から江戸に住んでいたらしいので，おそらく大部分の絵は小塚原（現南千住）の刑場に通い刑屍40体以上の解剖を観察して描いたものであろう[4]．図譜の作成には十数年かかったと言われる．しかも一屍毎に一臓一腑を見て「一屍毎に必ず真を写す」主義で臨んで詳細に写生し，臓器の色彩が時間の経過にしたがって変化する事を知っており新鮮な臓器を真実に近い色彩で描く事に努めたと伝えられる．一体の解剖につき一臓一腑のみを写生した事は一体の解剖ごとに意識を集中して丁寧に観察し正確に描写しようとした心構えを反映している．同時に，公許の下での活動であっても，刑場に長時間滞在する事は許されないという事情もあったであろうし，また当時，腑分には役人等数人が取り巻いて存在しており，一人だけが時間をかけて観察出来る状況ではないという事情もあったであろう．

図譜の構成

乾坤の二巻よりなる（第1図）．

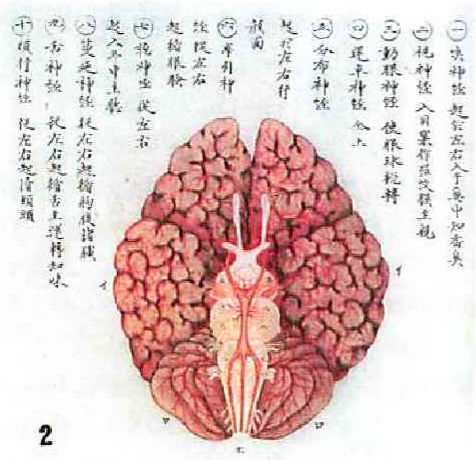
●乾巻

序文

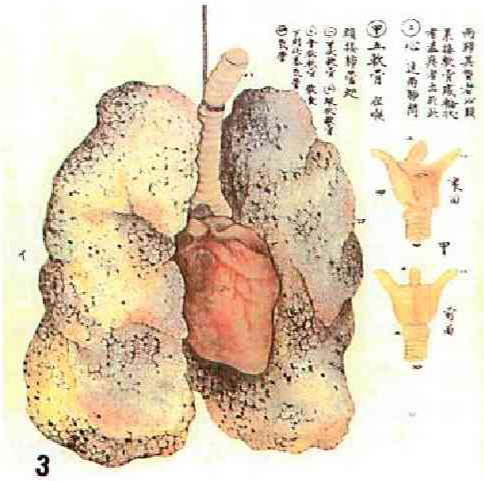
巻頭に桂川甫賢の漢文による解剖存真図引（序文）がある．寧一は若い時から月池先生（桂川家第四代甫周）に師事して外科を修め解剖の術を学んだ事，天文地理にも通じ，多識であり，加えて絵画に長じている事，桂川家にある小石氏の解剖図（註：小石元俊等作，平次郎解剖図と施薬院解男体臓図，説明後記）を賞賛したが精微を窮尽くしていない事を惜しんだ事，などが記されている．文末の署名は

Gedaan door Dr. W. Botanicus.

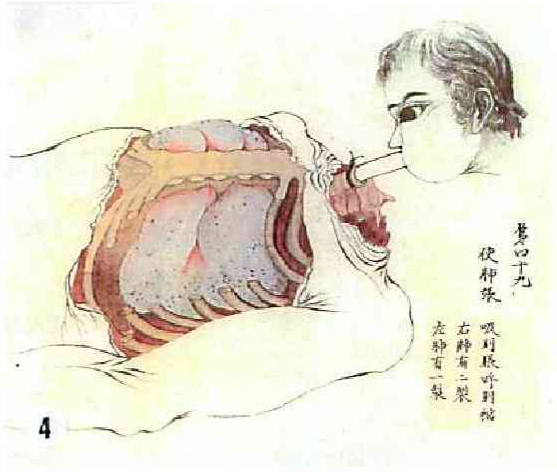
第1図　解剖存真図　乾坤二巻の外観



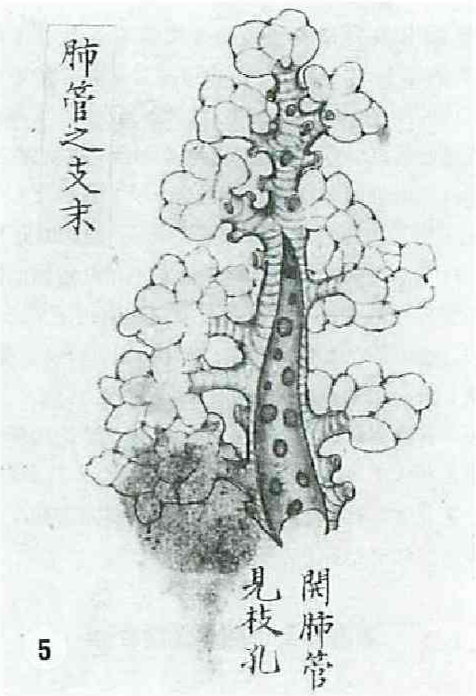
第2図　脳の底面　回と溝，脳神経の出る部位



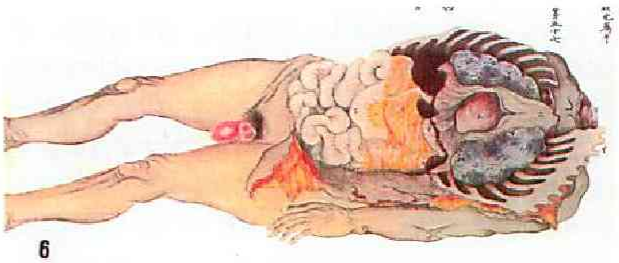
第3図　胸部内蔵前面と喉頭軟骨



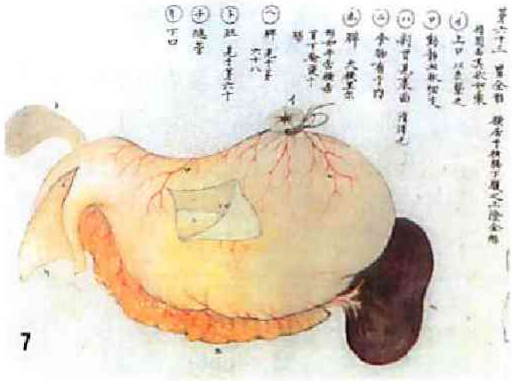
第4図　肺に空気を吹き込む図



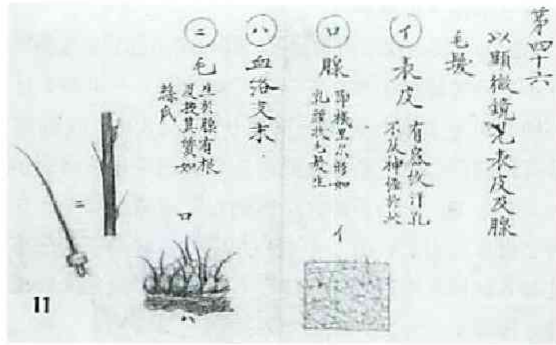
第5図　気管支枝と肺胞



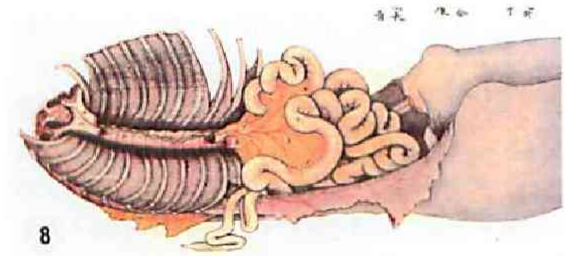
第6図　胸部および腹部内蔵前景



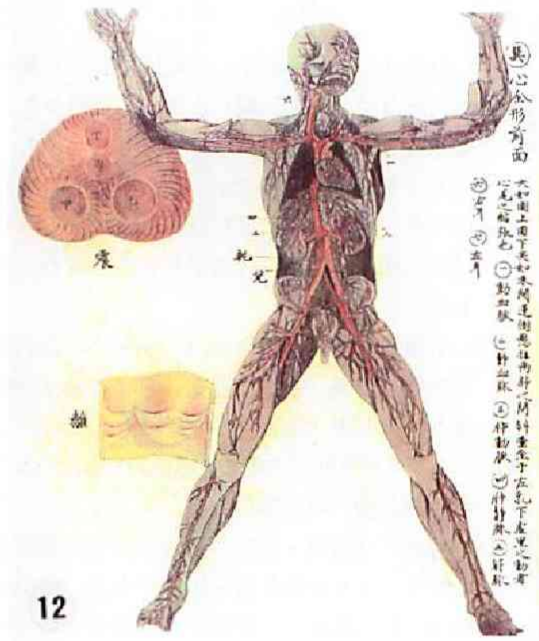
第7図　胃，膵臓と脾臓



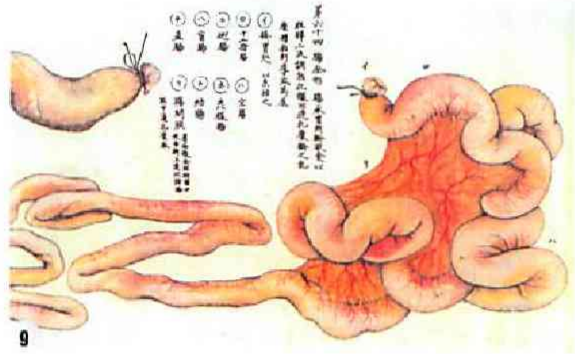
第11図　表皮，毛，皮膚の腺の顕微鏡図



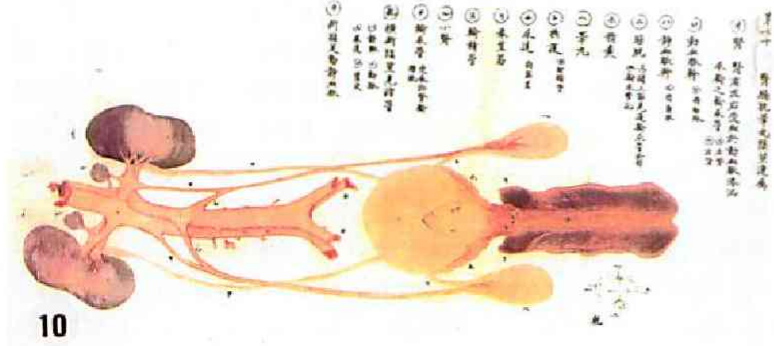
第8図　乳ビ槽，胸管と小腸，大腸の一部



第12図　全身の動脈系



第9図　小腸，小腸間膜と大腸の一部



第10図　男性の泌尿生殖器全景

第13図　女性生殖器と精子の顕微鏡図

シーボルトの賛辞

前記の序文と次項の附言との間の余白部分に朱筆でシーボルトの賛辞が記されている．商館医シーボルトは，南小柿が世を去った翌年（文政9年，1826）に商館長の参府に随行して上京した際にこの図譜を見る機会があった．そして，その正確さに感動し，賞賛の辞をオランダ語で書き込んでいる．すなわち「この解剖学的仕事は非常なる勤勉さを以て成し遂げられたるが故に大いなる賞賛を獲得す」と記されている．

附言

次いで寧一自身の漢文による附言がある．五項目からなる．

（一）　自ら44屍を解剖し，一屍毎に写生し蘭本及び小石氏の図（前記二編）と照らし合わせた．一屍について一臓一腑を詳しく観察した．

（二）　人は屍の諸臓器の大小，色は生体とは異なるというが，死後早期に見れば生体とは異ならない．ただ，死後長時間を経過すると色が変わるだけである．

（三）　諸臓器・組織の名称の内，漢医以外の名称である神経，靭帯，繊維，前綵などの新名は皆解体新書と医範提綱（後記）から採った．

（四）　オランダ解剖図六冊（名称後記）と，ハンガリー着色解剖図一冊を参照した．

（五）　解剖には道具・機器が必要である．蘭書の中でもヘイステルの書が最も明解である．以前に桂君梅街（桂川家第六代甫賢）が翻訳しているのでそれを記する．

第一次：大卓，直刀及び薙刀，鉗，鈎，消息子など六種類．

第二次：鋸，屠刀，槌など五種類と大小管など．

第三次：顕微鏡，蝋および汞を脈管等に注入する管数本，銅線，気機，血膏による汚染を防ぐ外衣など．

次目（図譜の内容の見出し書き）

注：一部の説明には現代の用語を使用した．（以下カッコ内に図の番号のみを記載）

中枢神経系：脳・脳神経（1～10），末梢神経系：全身神経（11），感覚器：眼球（12～13），耳（14），舌（15），筋：頭頸部（16～24），胸部（25），腰部（26），手（27～29），足（30～32），足の筋，神経，動静血管（32～33），骨：頭部の全骨（34～36），手（37），胸肋骨（38），胛骨（39），脊椎（40～41），足の諸骨（42），支柱全骨（43）．

●坤巻

次目（図譜の内容の見出し書き）

注：一部に現代の用語を使用，また説明を加筆した．

断首の痕（44），腹部の皮下脂肪・血脈（45），顕微鏡図（表皮，腺，毛髪）（46），胸部全景（47），肺（48～51），心・脈管（52），腹筋・腹膜（53），腸網（大網55，56），肝・胆（57～60），門脈（61～62），胃・膵・腸（63～65），乳糜（66）と再び乳糜（67，Palfynの解剖書より転写），脾（68），腎・膀胱（69～72），睾丸（73）腎の水脈（リンパ管，74，Palfynの解剖書譜より転写），婦人陰器全景（75，Smellieの解剖書より転写），腰骨（76～77，Smellieの解剖書より転写），子宮（78～80，80の中に精子の顕微鏡図），胎児（81～82），胞衣・臍帯（83）．番外付図に妊娠したサルの解剖図四図がある．文政5年（1821）2月の所見である．図譜の完成後に付け加えられた図であり蕤蘭堂主人の署名がある．南小柿寧一と如何なる関係にあるのか，本人であるのか不明である．次のような記事がある．「文政壬年（5年）2月，孕猴を解剖す．その胎，月満ちたる者の如くにして，子宮，胞衣，諸臓器の連続，人と異なる無し．予，細かにその形状を写し，以って巻端に付す蕤蘭堂主人」．

跋（後書き）

次の五編の跋文が寄せられている．大槻玄沢（漢文），宇田川玄真（オランダ語），杉田立郷（オランダ語），大槻玄幹（漢文）及び佐々木中沢（漢文）による．それぞれに医学における解剖の知識の必要性を説き，人体内景を明確に示した図譜を作成した寧一の努力とその図譜の優秀さを讃えている．各跋につきそれぞれ一部を次に記す．

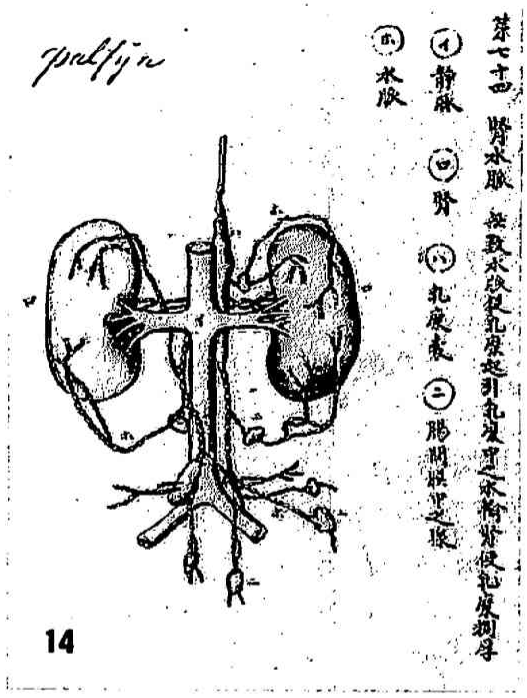
◆大槻玄沢（仙台藩医，医学を杉田玄白に，蘭語を前野良沢に学ぶ，重訂解体新書などの著者）：「磐水漫草」にもある解剖存真図跋には次のように記されている．「余嘗て荷蘭解剖諸図を見る．既に数十部に及ぶ．未だ嘗てその精巧緻密に嘆服せざる事あらざるなり．ただ未だ，その諸器を彩って，その真形を存し，人をして親しく実物を視る想いをなさしむる者を見ざるを恨む．桂家の社の南寧一，亦己に之を視，手ずからその図を撫し，且つ補うに他の解剖諸図を以てす．又，自ら新図を製し，屢々諸を解屍に徴し，毎にその本色を改潤す．積年の久しき，解剖存真図成れり．把りてこれを展開すれば，屹然として躬親しく解剖場に在るが如し．其の丹青の妙，篤好の志蔚然として幅に満つ．奇なりと謂うべし．桂家累世英才を教育す．寧一は蓋しその選という．実に欽仰すべきかな」．後略．

◆宇田川玄真（伊勢の医師，医範提綱の著者，緒方洪庵の第二番目の師）：Palfyn の語を引用し，病因を知らないで病気を治す程困難なことはない．しかるに解剖学的知識なしに病因を知ろうとすることは更に困難であると記している．

◆杉田立卿（若狭藩医，杉田玄白の子）：医師が解剖学を知らないで病を治すことは，盲人が盲目の馬に乗って夜歩くのと同じであり，外科医も内科医もまず人体の部分を正確に知らなければならない．

◆大槻茂碩（大槻玄沢の子，磐里）：賛辞を大槻如電の「新撰洋学年表」の中にも記している．一部を紹介すると次の通りである．「巻を展いて之を観るに，その畫描する所，人身内外諸部，三腔十器，粲然として備え具す．その大小曲直，幽密陰顕，色彩之濃淡，殆んど真物に逼る．寧一，曾つて西洋の解剖図若干部を挙げ，その善なる者に従ひて校讎繕写し，親しく自ら解屍の場に臨みて照鑒し，その然らざる者は塗抹すること亡慮数十度．嗚呼勤めたりと謂ふべき也．中略．寧一，故月池先生の高足の弟子なり．今都下に於て一家を成す（日本橋にて医業に従事）．後略．

◆佐々木中沢（大槻玄沢の門下，仙台藩，存真図腋の著者，詳細後記）：解剖学は医学の根本であり先ず最初に理解するべきものである．中国の最も古い古典である「内経」には既に解剖の必要性が説かれており，前漢の解剖文献を北宋での解剖実施時に参照したことが記載されている．日本では，山脇東洋が初めて公許の下に解剖して「蔵志」を著し，杉田玄白は解剖の後洋書を訳して解剖書を出版した．しかしまだ精巧な解剖図譜がない事だけが心残りの状態であった．南小柿寧一が図譜を作ったのはその時代である．原文の一部を紹介する．「南小柿甫祐は丹青を善くす．嘗て月池先生に侍し親しく解剖の学を受く．乃ち西洋解剖諸図に就いて，精を莽め，華を咀し，又，之を真屍に試むること数十次，精を覃くし思いを積み，以て解剖存真図を成す．最も能くその法を得たる者と謂ふべし．今より後，解剖図譜を以て海の内外に雄視する者，吾れ指を甫祐に屈せん哉．中略．甫祐の丹青の妙，心を用いるの厚きは即ち諸先生之れを尽くせり．余復た何おか賛せん」[4, 7]．

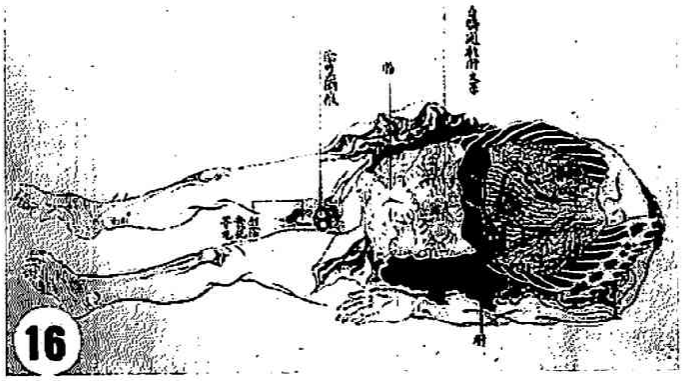


第14図　腎臓のリンパ系　左上の文字は本図が Palfyn の解剖書より転写したものである事を示す

第15図　平次郎解剖図　摘出した内蔵全景

図の特長

江戸時代までの図譜の共通の弱点とされていた膵臓，副腎，神経系，動脈の走行，門脈又小腸と大腸の差なども詳細に描写されている．特に気管に管を挿入し肺に息を吹き込んで肺を拡張した状態として肺を表面から描いた図（第4図，原図第49）は臓器の生理的な状態での形態を示そうとしたものであり，また，小腸の係蹄と，後腹壁から剥離した大腸とを連続したまま描いた図（第9図，原図第64）は腸間膜が小腸のみに存在する事を容易に理解させる描写である．この二図のような構図は他の解剖図譜にその例を見ない．



第16図　平次郎解剖図　胸部および腹部内蔵前景

各図に描かれている臓器，組織の中または近くには㋑，㋺，㋩，系列の文字が付され，図の主に右上部の空間にそれぞれの文字に相当する臓器，組織の名称と短い説明が記されている．また，主たる図の説明の為の付図がある場合には㊥，㋙，㋭などの文字を付けてある．「肺の全景」（第3図，原図第50）を例にとってみると，㋑：右肺。二裂あり，㋺：左肺。一裂あり，㋩：気管。岐れて両肺に入る．其の質は，幕を以て軟骨に累接して輪状を成す者なり．蓋し接する処に在り㊀：甲状軟骨。㊁：環状軟骨．㊂：会厭軟骨。飲食下れば，則ち伏して気管を塞ぐ．㊃：気管．図の作製に当たり，六冊の西洋解剖書と一冊の西洋解剖図譜を参考にしている．

そして，第83図の内，第4図は外書より写している（前記）．すなわち，原図第67「再び乳糜を示す」と原図第74「腎の水脈（現リンパ管）」（第14図）はパルヘイン Jean Palfyn の解剖書より，原図第75「婦人陰器の全体」および原図第76「腰骨の全形・前面」はスメルリ William Smellie の解剖書よりとっており，それぞれの説明欄に採った解剖書の著者名を明記してある．そして原図第46「顕微鏡を以て表皮及び腺　毛髪を見る」（第11図）および原図第80（第13図）には，日本の解剖書としては初めて著者自身が描いた顕微鏡像が掲載されている．

高度の絵画技術は天性によるとはいえ，父方の伯父竹沢養浜に負うところ大であると言われる[4]．また，丹青の使用には格別の技を持ち合わせていたと伝えられる．描きあげた文政2年には35才であった．山脇東洋の蔵志や杉田玄白の解体新書の絵は絵師が描いたが，解剖存真図では絵の作成を絵師に頼まず医師である本人が自己の観察に礎いて自分で描いている．

（註）

参考にした西洋解剖書および解剖図譜

クルムス	Johann Adam Kulmus
ブランカールツ	Steven Blankaart
ヘイステル	Lrenz Heister
バルトリン	Thomas Bartholin（原著は東牟斯）
パルヘイン	Jean Palfyn
スメルリ	William Smellie

ハンガリーの着色解剖図譜（著者不詳）[4]

解剖用語

各図に付属する説明文中で臓器名等を示す解剖学用語は「解体新書」（杉田玄白，1774）と「和蘭内景医範提綱」（宇田川玄真，1805）によるものが多い[4]．

（註）

◆解体新書はクルムスの解剖書の翻訳であるが，翻訳に際して前野良沢は次のような三種の翻訳法をとり，後漢以来の五臓六腑の名称の他，従来日本で使われて来た名称に新語を加えた．

1）翻訳：蘭語に相当する日本語を当てはめた．
　凡例　ベレンデン→骨．

2）義訳：相当する日本語が見当たらないので新たに造語した．凡例，カラカベン→骨であって柔らかいもの→軟骨．

3）直訳：相当する日本語も，その概念も共にない場合には蘭語の発音をそのまま日本文字で表した．キリイル→機里爾（参考：後に腺と名付けられる）[5, 8]．加えるに義訳の凡例の中に頭蓋骨神経[9]，神経[4]を入れた文献もある．

神経についてはその存在は南蛮医学や紅毛医学の伝来

以来既に知られていたが，通詞が蘭語 Zenuw をそのまま世奴（セイニュ）と訳したり，中国語を使って髄筋と訳して使っていた．杉田玄白は神気の神と経脈の経を合わせて神経とした[10]．すなわち，存在は古くから知られていたがそれに義訳としての名を与えられ書物の中に初めて引用されたのが解体新書であった．この点で軟骨等とは異なる訳され方である．

心臓は漢方では神すなわち精神が宿る場所とのみ説明されているが，蘭方では全身に血液を送り出す源であるとしている．漢字の心臓が蘭語の hart と同一の臓器を示すという根拠は何もないが，両者の位置と形状から，hart は心臓であると言わざるを得なかった[11]．

◆医範提綱（1805）は宇田川玄真著，三冊からなる．門人の諏訪直徳が玄真の講義を筆記したもの．図譜（第52図・15枚）は三年後に日本初の銅版で出された．平易明瞭な文章で西洋解剖学を説き，生理学を含み，疾病の原因にも言及し，当時の医師に益する事大であったと言われる．脳神経，脊髄神経などの説明もあり，交感神経幹に相当する神経も記載されている．臓器の名称等も今日の用語に甚だ近く，わが国の解剖用語は医範提綱に起因するものが多く，宇田川玄真に負うところ大であると言われる．一例を挙げれば大機里爾を膵と訳しており他にも幾つかの字があるがこの字が今日まで使用されている．なお，膵は肉のような腺のようなものが集まった肉様のものを意味している．

宇田川玄信（一部前記）本姓安岡，伊勢生まれ，蘭学を大槻玄沢に学ぶ．一時杉田玄白の養子となったが去る．桂川甫周の弟子宇田川玄随（津山藩医，漢方医後蘭方医）に学び，後に宇田川を襲ぐ．桂川甫周とも交わりがあった[5, 8, 12-16]．

このように，解剖存真図ではその時代に得られる最も新しい用語が用いられていた．

図譜についての考察

この図譜については次のような特長を指摘する事が出来る．

1）ほぼ200年以前の図譜でありながら，既に今日の解剖図譜に見られるような構成の図が多い．図柄に関しては西洋解剖図の影響が大きいと考えられる．

2）臓器の色が死後時間の経過と共に変化する事を知っていて死後早期の臓器を見て描いているので色彩が真実のものに近い．

3）医師自ら解剖し描画したので視点が医学的関心に礎いて細部におよんでいる．日本における解剖の例は歴史的に幾編かの書または図譜として残されているが，初めて公許を得て腑分けを行ったのは山脇東洋であり，蔵志という解剖図録を著した．これが刺激となり杉田玄白等は腑分けを行い，蘭書を翻訳して解体新書を出版した．以後，腑分けおよび解剖に関する書・図の作製は多く行われた．しかし，これまで多くの場合，腑分けを実施する人は特別な解剖担当者であり，図は絵師が描いていた．18世紀後半になり，医師自ら腑分けを行い，図録を記録する書が多く出版され始めた．観臓図巻（栗山孝庵，1758）から解臓図（中山藍江，1800）までの間にこの二図録を含めて九編が遺されている．更に，19世紀前半になると，解剖学史上特筆すべき六編の解剖書が出版されている．すなわち，解体発蒙（三谷機，1813），解剖存真図（南小柿寧一，1819），解剖図賦（池田冬蔵，1822），存真図腋（佐々木仲沢，1822），導窾私録（小出君徳，1836），南陽館一家言（賀川秀哲，1841）である．この中でも解剖存真図は19世紀前半における日本人が作った最高の解剖図集といわれている．以後，明治になると，江戸時代のような日本固有の解剖図録は消えて行く事になる[5]．

4）西洋の解剖書を参照しているが本図譜独特の図柄が多々ある（二例前記）．

5）未固定すなわち，フォルマリンやアルコール等で固定処理をしていない状態でありながら臓器相互の位置的関係，臓器内外の脈管・神経の分布とそれらの分布上の立体的な相互関係等の細部を観察し描いている事は特筆に値する．外科医としての経験と優れた観察眼によるものであろう．

6）「一回の解剖に一臓一腑観察」の原則を守りながら，十数年にわたって刑場に通い解剖し描写した事は強い意志と根気の良さを感じさせる．

7）附言の中に解剖用具についての説明がある．蘭書の翻訳であるにせよ，管腔性臓器や脈管等に蝋や色素を注入し，また，肺に空気を送り込む為の各種小管を除いて，記載されている機器は今日使用されている機器・器具と非常に近似している．

8）図の中で乳糜槽（現在は乳ビ槽と記す）と胸管の関係，胸腔内の静脈の走行等やや解り難い部分がある．また，図の説明文の中で今日の理解と異なる部分がある．たとえば脳神経の数は第一頚神経を含めて十対（解体新書も同じ）[15]，脊髄神経は左右各三十（解体新書も同じ）などの記載である．しかし200年近くも前に，刑場内で限られた時間内に，無固定

の屍体を解剖し，観察し，描写した優れた能力によって得られた成果に影響を与えるものではない．むしろ人体の構造を，その当時，ここまで詳しく調べ図譜として残した努力が賞賛される．

9）顕微鏡による図が二図ある（前述）．原図第49（第11図）表皮及び腺，毛髪と，原図第80（第13図）女性性器の図の欄外に描かれた精子が顕微鏡図である．これらは表面からの観察であり切片標本ではない事がわかる．何処で顕微鏡観察を行ったかは皮膚の一部を刑場外に持ち出せるか否かと顕微鏡を刑場内に運び込めたか否かにかかわる事であり，不明のままに残る．附言には顕微鏡二台を備える事と書かれている．しかしこれはヘイステル解剖書の翻訳内容であるから，実際に南小柿が二台を備えていたか否かはわからない．

顕微鏡はオランダの眼鏡屋ヤンセン父子が創製したとされる（1590）．その後にイギリスのロバート・フックは二枚の凸レンズを鏡筒につけた複式レンズ顕微鏡を作成した（1660年頃）．更に，レンズを小さい孔のある二枚の金属板に挿んだ単式ではあるが複式よりも倍率の高く266倍もの倍率を持つ顕微鏡がレーウエンフックにより作成されている（1673年頃）．また，台座，三本の支脚及び反射鏡のついた複式レンズ顕微鏡がロンドンのカルペパー（1725）によって作られている．

その時代に顕微鏡が日本にあった事は確かである．森島中良著「紅毛雑話」（1787）に「顕微鏡」（"むしめがね"と読み仮名付き）と題して「ミコラスコーピユン之図」という挿絵説明のある紅毛渡りの顕微鏡の写生図（司馬江漢作）と，それによるノミ，ボウフラなどの観察図が掲載されている．顕微鏡という名称は中国人の訳語であり日本人は顕微鏡と書いてムシメガネと読んでいた．また，ミコロスカウヒヨム，ミイコロシコウピヨムなどと呼ばれていた．おそらく18世紀の後半にはかなり行き渡った存在であったと考えられる[10, 16]．

顕微鏡図が最初に掲載された医学書は解体新書であり毛髪の拡大像が示されている（1774）．しかし，これはクルムスの解剖書の転写であり杉田玄白等の著者が観察して描写した顕微鏡図ではない．著者が自ら顕微鏡図を描き掲載した医学書，図譜としては解剖存真図が最初となる．

当時の日本に顕微鏡があった事を示す幾つかの記述がある．たとえばシーボルト（在日1823～1829）が長崎で使っていた顕微鏡は現存し早稲田大学に保管されている[10]．また，寛政4年（1792）にロシア船が通商を求めて来日したがその折りに日本の漂流民，大黒屋幸太郎と磯吉とを松前に送り返して来た．この時，幕府の依頼で幸太郎の事情聴取に当たった桂川甫周が幸太郎の持ち帰った顕微鏡を写生した絵がある．挿図説明にはミテレスコッポと記されている[7]．加えて甫周は享和2年（1802）2月26日に将軍家斉に顕微鏡の使い方を説明している事[7, 18, 19]などから顕微鏡は既に日本にあり，桂川家が顕微鏡の利用に際して便宜を図れる立場にあった事が想像される．そして甫周は南小柿の師であり解剖図の作成を奨めた点からも，南小柿が顕微鏡を使用したとしたら甫周の支援の下で使用したと推定するのが順当であろう．　なお，甫周の写生図から推察すると，顕微鏡は四脚付きのカルペパー型の一種であろうと思われる．また前記の紅毛雑談に掲載されている写生図もそれと類似の構造である．

存真という語

存真という語について，酒井（口述）は「物事の在りのままの姿」と説明している．現在の日本の辞書にこの語は無い．南小柿が此の語を図譜の題名の中に用いた根拠に関する記録は見当たらない．解剖存真図以外に存真という語が書名に使われた例は二つある．

◆存真環中図：中国の崇寧年間（1102～06）に泗州の賊を死刑にした時に郡主の李夷行は医師と画工に解剖の結果を図に描かせた．この臓腑図を後に楊介が校定して「存真図」と名付け北宗の時代の政和三年（1113）に他の本を合わせ「存真環中図」と名付けて一つの解剖図譜とした[14, 20]．酒井によるとこの図譜が日本に来たか否かは明らかではなく，また，来たとしても多くの人の目に触れた記録は無いという．

◆存真図腋：文政5年（1822）に陸中・一ノ関出身の佐々木中沢が著した解剖書．佐々木は建部清庵に医学を学んだ．江戸に出て大槻玄沢等に師事して蘭学を修めた後に仙台に帰り渡辺道可の主催する仙台藩医学の西学教諭となった．文政5年6月29日，仙台北郊七北田において女性の屍を解剖した折に渡辺の奨めにより男性と異なる部分に集中して観察し畠山仙江の筆になる七つの解剖図と詳しい説明を記載した．南小柿の解剖存真図に女性の図が少ないので不足の部分を補う意味で存真図腋と名付けた．ところが，この解剖は仙台の医界に衝撃を与え，漢方医は強く反対し，江戸の漢方医学の名家の多岐元堅も呼応した．結果，本書は版下のみで永く伊達家の書庫に保管されたままとなった[12]．別の文献によると，佐々木仲沢は文政5年3月から仙台藩の医学校養賢堂で蘭方医の教授にとなった年の5月に，女性刑屍の腑分を

する機会を得た．中略．江戸で同学であった南小柿寧一の『解剖存真図』の不十分である点を補ったと記されている[5]．また，佐々木の名には中澤，仲澤，中沢，仲沢の記載がある．

（註）

広辞苑によると腋（脇，掖）には「主役の次に位し，それを助けるもの．わき役」という解釈もあるので，存真図腋の腋はこれに該当する意味で使われたのではないかと思われる．また，別々の二冊の図譜に共通の『存真図』という特殊な名称が用いられている事から，南小柿と佐々木との間には何らかの接点があったであろう事が想定される．しかし，前記の「同学」が蘭医としてなのか，桂川家の門下生としてなのか，あるいは他に共通の学の場があったからなのかは不明である．

解剖存真図作成の動機

解体新書が出来てから50年近く経過し，既に10種類以上の解剖書や図譜が刊行されている当時の状況下で新たに解剖図譜を作成した動機は，前記の如く南小柿が桂川家にあった平次郎解剖図（1783）（第15，16図）や施薬院解男体臓図（1798）を見て感嘆はしたが精密度が充分でない事を残念に思い，自ら観察し描写しようと決めた事による．加えて師の桂川甫周（第四代）の奨めもあったと伝えられる[4, 7]．以下，解剖存真図作成の動機付となった二つの図譜について概要を述べる．

◆平次郎解剖図：作成の主催者は橘南蹊であり，小石元俊が伏見で平次郎という40才の刑屍を解剖．図譜は前面を開胸・開腹し臓器を全体として描写したものが主体で，細部では膵臓が異常に大きい事および輸尿管が明瞭でない事などが指摘されている．解体新書の影響はまだ少ないといわれる．写生は吉村蘭洲．蘭洲は円山応挙と共に石田霊汀の門人で西本願寺の画師である．

橘は伊勢の国の藩士宮川保長の五男で医の橘家を継いだ．香川大沖，賀川子玄に学ぶ．解剖の実施には小石の力を借りた．

小石元俊は祖父まで小浜藩の家老であった．父の時代に小浜を去る．大阪にて山脇東洋の高弟淡輪元潜に古医方を学び，淡輪の勧めで同じく東洋の門人であり漢蘭折衷派の永富独嘯庵に学び京都で開業．解体新書を見て実証に基いた蘭医学に心を打たれ，小浜藩の杉田玄白が京都を訪れた時及び江戸においてに蘭医学の教えを乞い，また，江戸で大槻玄沢家に寄寓して蘭医学を論じ蘭学者と交わった．京都において古医方と論じ，腑分を行って蘭医学の実証性を示した．京都火災の後大阪に移るが京都の医家に蘭医学の道を開いた功績は大きいといわれる．当時の実地解剖学の第一人者であった．加えて，刑死の病者を腑分けし生前の症状との因果関係を明らかにする努力をしたと伝えられ，病理解剖の先駆者でもあった．

◆施薬院解男体臓図：主催者は三雲環善（本姓は施薬院）．山脇東海および小石元俊と共に京都において作兵衛という34才の刑屍を解いた解剖図．解体新書の影響は大きいといわれる．橋本宗吉写が蘭語で各器官の名を記入している．橋本宗吉は大阪出身で他の業についていたが小石元俊が才能を認め，江戸の大槻玄沢の門に入れて蘭医学を学ばせた．後，大阪で医業を開き，又蘭学塾絲漢堂を興し蘭語を教授した．門弟の中天游は緒方洪庵の師である．すなわち，橋本宗吉－中天游－緒方洪庵－福沢諭吉の大阪蘭学の系譜は橋本から始まったのである．写生は再び吉村蘭州であり，その子吉村孝敬および丸山応挙の子木下應受が助けた．平次郎解剖図よりも15年後に出来た図であり，格段に精密である[5, 12, 21]．

南小柿寧一による重訂解体新書付図の作製

重訂解体新書は大槻玄沢が師の杉田玄白の要請により不完全な解体新書を改訂したものである．新書と同じクルムスの解剖書の完訳である．大槻玄沢は解剖存真図に跋を寄せ南小柿の努力と解剖存真図の内容を賞賛しているが（一部前出），その最後に，解剖存真図を見ながら自分が著述している重訂解体新書を読めば良く理解出来ると記している．大槻玄沢は南小柿寧一の優れた描写能力を知っており，重訂解体新書の付図の作製を寧一に依頼した．図数は175図である（解体新書は151図）．クルムス解剖書の原典，イギリスの解剖書を主体とし，いろいろな西洋解剖書（後記）から模写して作成した．この時代には既に銅版があり，作成した図はその銅版の下図となった．図は文政4年（1821）に完成したが，寧一は文政8年（1825）に本書の完成（1826）を見届ける事なしにこの世を去った[22]．

（註）

解体新書は西洋医学における人体の構造及び機能の解釈が東洋とは全く異なる事を初めて伝えた点で大きな意義があった．クルムスの解剖書の翻訳は辞書もなく困難を極めたが大変な努力で乗り越えた．しかし，出版を急いだ事もあって誤訳が多い事は杉田玄白自身がよく知っていた．玄白は門人の大槻玄沢に新書の改訂を依頼した．玄沢は寛政元年（1789），一説には寛政2年（1790）に編纂を開始し36年後の文政9年（1826）に重訂解体新書を完成した．解体新書が出版されてから52年目で

ある．内容はクルムスの解剖学の完訳であるが原典の脚注は訳されていない．解体新書は5冊から成るが重訂解体新書は12冊から成り，南小柿が作成した解剖図は「重訂解体新書付図」として独立して出版された．

参考にした西洋解剖書は次の通りである．Bartholomaeus Eustachius, Steven Blan－kaart, Philip Verhyen, William Cowper, Jean Palfyn, Hendik van Deventer.

これらの内，解剖存真図作製時と重複して参考にした書はBlankaartとPalfynの二冊のみである．用語については解体新書の用語の不完全なものや誤りを改め，加えて玄沢が不適当と思う語や，訳語が出来ていなかったものについては玄沢自身が語を造っている[12, 22]．

終わりに

解剖存真図の出版は南小柿の発意と努力によるものであるが，その背景には桂川家の直接および間接の支援があった．そして同家はやがて福沢諭吉先生の江戸における活躍および咸臨丸による渡米と密接に関係する事になる．更にこの時代が日本における漢方中心の医学から西洋医学への重要な変換期であり，その転換を推進した機運と諸活動が背景にあった事が伺われる．

図は慶應義塾大学信濃町メディアセンター所管の解剖存真図写本より採った．解剖存真図につき調査の過程で順天堂大学医学部酒井シヅ 客員教授より多くの御教示をいただいた．また，原図および関係書類の閲覧，図の転写等には，前慶應義塾大学三田メディアセンター貴重書室市古健次課長代理，元慶應義塾大学信濃町メディアセンター武正恒事務長，および現信濃町メディアセンター風間茂彦事務長に大変お世話になった．稿を閉じるに当たり，寄せられた御厚情に深く感謝する．

文　献

1) 慶應義塾図書館所蔵「解剖存真図」の重要文化財指定について．三田メディアセンターニュース 65，2003
2) 市古健次：解剖存真図．慶應義塾 OPEN 12：2003
3) 文化庁文化財部：月刊文化財 477（文化庁文化部監修）第一法規出版：2003
4) 小川鼎三：解剖存真図．講談社，1975
5) 小池猪一：図説「日本の“医学”の歴史」上．大空社，1993
6) 酒井シヅ：江戸の病と養生．講談社，2003
7) 今泉源吉：蘭学の家桂川の人々．篠崎書林，1965
8) 片桐一夫：蘭学事始とその時代．日本放送出版協会，1997
9) 阿部　泉，蔵方宏昌：複製『解体新書序図の巻』と解説．つくばね舎，1994
10) 杉本つとむ：江戸の阿蘭陀流医師．早稲田大学出版部，2002
11) 吉良枝郎：「日本の西洋医学の生い立ち」－南蛮人渡来から明治維新まで－．築地書館，2000
12) 小川鼎三稿：明治前「日本解剖学史」第一巻．（日本学士会編）日本学術振興会，1955
13) 原三信：日本で初めて翻訳した解剖書．六代原三信蘭方医三百年記念奨学会，1995
14) 山田慶児，栗山茂久：歴史の中の病と医学．思文閣出版，1997
15) 杉田玄白：解体新書．講談社学術文庫 1341（酒井シヅ訳）講談社，1998
16) 馬場悠男：人体の世界．（坂井建雄編）読売新聞社，1995
17) 中央区内散歩・史跡と歴史を訪ねて．（中央区企画部広報課編）1988
18) 中央区内散歩・史跡と歴史を訪ねて．（中央区企画部広報課編）1992
19) 外川行夫：オランダ流御殿医「桂川家の世界」．築地書館，1994
20) ライオンズ・アルバート・S.，ベルトセリ・R．ジョセフ：図説「医学の歴史」．（小川鼎三監訳）学習研究社，1984
21) 梶田　昭：医学の歴史．講談社学術文庫 1614 講談社，2003
22) 酒井シヅ：解体新書と重訂解体新書 大槻玄沢の研究．（洋学史研究会編）思文閣出版，1991